

金沢大学 自然科学系図書館開館記念シンポジウム

これからの学術コミュニケーション

ー 電子ジャーナル・オープンアクセス・機関リポジトリ ー

平成 17 年 11 月 22 日（火） 13:00～17:15
金沢大学 自然科学系図書館 G1 階 AV ホール



基調講演

学術コミュニケーションの現状と改革

- － 機関リポジトリとオープンアクセスを中心に －
竹内比呂也（千葉大学文学部助教授）

報告（１）

研究者は何を選択するか

- － 購読料・投稿料そして機関リポジトリ －
永井 裕子（日本動物学会事務局長）

報告（２）

HUSCAP 北海道大学学術成果コレクション

杉田 茂樹（北海道大学附属図書館）

報告（３）

オープンアクセスとセルフアーカイビングについて

- － エルゼビアの対応 －
高橋 昭治（エルゼビア・ジャパン）

パネル討議

学術コミュニケーションの現状と課題について

司会 森本 章治（金沢大学大学院自然科学研究科教授）

学術コミュニケーションの 現状と改革

機関リポジトリとオープンアクセスを中心に

竹内 比呂也

千葉大学文学部／
附属図書館ライブラリー・イノベーション・センター

本日の内容

- 学術コミュニケーション再考
- 「シリアルズ・クライシス」への対応
- オープンアクセス雑誌／機関リポジトリ
- まとめ：学術コミュニケーションの改革と大学図書館の役割

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

学術コミュニケーション再考

- 学術（科学）コミュニケーションの特徴
 - －「研究者の研究者による研究者のため」のコミュニケーション
 - －「フォーマル」コミュニケーションと「インフォーマル」コミュニケーションの峻別
 - －学術雑誌の独占的な地位
 - ・「査読」制度による質のコントロール

<このような特質は今も保たれているだろうか？>

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

「研究者の研究者による研究者のため」のコミュニケーション

- 出版主体の変化
- 特定出版社による市場寡占
- 価格の高騰・図書館予算の縮小

>>シリアルズ・クライシスの発生

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

「研究者の研究者による研究者のため」のコミュニケーション

- 情報発信者としての研究者から見た「シリアルズ・クライシス」
 - －研究成果が十分に伝わらない
 - －長期的に見た場合に成果発表の場の減少につながりかねない
 - －学術情報流通が一部の商業出版社に独占されることに対する心理的反発

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

シリアルズ・クライシス

- これは学術情報流通システム全体にとっての危機ではなかったか？（今振り返って考えれば。）
 - －これに対する対応策
 - ・ビッグディール
 - ・「代替雑誌」→オープンアクセス出版
 - ・オープンアクセスアーカイブ／リポジトリ

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

ビッグ・ディール(Big Deal)

- 電子ジャーナルの登場によって可能になったビジネスモデル
 - コンソーシアムへの脚光<図書館協力の形態としての再認識>
 - 結果的にはわが国の国立大学附属図書館におけるILL依頼件数の減少をもたらした
 - ただし常に価格の上昇との戦いの中に図書館はおかれている

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

SPARC

- ARLによって1998年に創設
- 「代替雑誌」の刊行
 - 従来の「学術雑誌」の枠の中での変革
 - 一定の成功
 - しかし結局は図書館が買わなければならないタイトル数を増やしただけ??

>>>オープンアクセス運動の支援へ

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

フォーマルとインフォーマル： 電子化以後

フォーマル		インフォーマル
不特定多数	対象	不特定多数
学術雑誌 (電子ジャーナル)	媒体	プレプリント サーバ
図書館/図書館以外の 場所(?)での保存	保存	図書館以外の場所 での保存

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

フォーマルとインフォーマル

- 電子化により、利用者から見た場合区別が曖昧になっている。
 - どちらも卓上のコンピュータ経由で読めてしまう。
 - むしろ、むしろ旧来インフォーマルと考えられてきた領域の方が広い読者層によってアクセス可能>>>オープンアクセス運動!

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

オープンアクセス

- "free availability on the public internet, permitting any users to read, download, copy, distribute, print, search, or link to the full texts of these articles, crawl them for indexing, pass them as data to software, or use them for any other lawful purpose, without financial, legal, or technical barriers other than those inseparable from gaining access to the internet itself".(Budapest Open Access Initiativeによる)

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

オープンアクセス

- 様々な定義される
- 「学術論文への障壁なきアクセス」
(by 尾城幸一)
 - アクセスにおける障壁の除去
 - 利用における障壁の除去

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

オープンアクセスの展開

- 2002.2 Budapest Open Access Initiative(BOAI)
- 2003.6 Bethesda Statement on Open Access Publishing
- 2003.10 Wellcome Trust position paper
- 2003.10 Berlin Declaration on Open Access to Knowledge in the Science and Humanities
- 2003.12 UN World Summit on the Information Society Declaration of Principles and Plan of Action
- 2004.1 OECD Declaration on Access to Research Data From Public Funding
- 2004.2. IFLA Statement on Open Access to Scholarly Literature and Research Documentation

Source: 倉田敬子

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

オープンアクセス

- 学術研究にかかわる様々な人たちの関与
 - 政府
 - 大学
 - 研究助成機関
 - 研究者
 - 出版者
 - 学会

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

オープンアクセス／リポジトリを巡る政策的動き（米国）

- 米国下院歳出委員会
 - 2004年7月 NIH (National Institutes of Health) の補助金によって行われた研究成果のPubMed Centralへの登録義務化案
 - 2005年2月 「2005年5月以降、12ヶ月以内に著者の最終稿を登録することを『要請』する」(義務化ではない)

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

オープンアクセス／リポジトリを巡る政策的動き（英国）

- 英国下院科学技術特別委員会
 - 2004年7月 学術雑誌の価格問題とオープンアクセスに関する調査報告
 - 2004年11月 政府が拒否
 - 2005年2月 “機関リポジトリを否定しない”
- Wellcome Trust
 - 2005年5月 UK PubMed Central創設提案
 - 2005年5月 助成を受けた研究成果を米国のPubMed Centralか創設提案されたUK PubMed Centralへの登録義務化へ
- 英国研究評議会連合(Research Councils UK)
 - 2005年6月 オープンアクセス方針案 “Access to Research Output” 公表

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

オープンアクセス実現の方策

- オープンアクセス雑誌 →
- セルフ・アーカイビング
 - 自分のwebページでの公表
 - 主題別e-print Archive
 - 機関リポジトリ

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

オープンアクセス雑誌

- 世界で1,888誌 (2005年11月6日確認、“Directory of Open Access Journals”による)
- 「著者支払いモデル」
 - BioMed Central(2000～ 著者支払いモデルは2002年から、また機関会費制の併用)
 - PLoS Biology(2003～)
- 部分的なオープンアクセス雑誌は他にもある(バックナンバーの無料公開)
 - Highwire Pressなど

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

わが国のオープンアクセス雑誌

- 研究紀要：302誌（名古屋大学附属図書館による）
http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/db/kiyou/
- J-Stage：245誌中189誌に“Free”印

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

主題別e-Print Archive

- 1991 Ginsparg(ロスアラモス国立研究所)によって始められたarXivが始まり。現在はコーネル大学にサーバ設置。
 - 高エネルギー物理学等では定着（もともと物理学分野はプレプリントによる情報流通が機能していた分野である。）
 - 化学では失敗。
 - あくまでも研究者の「自発的な」活動に過ぎない。

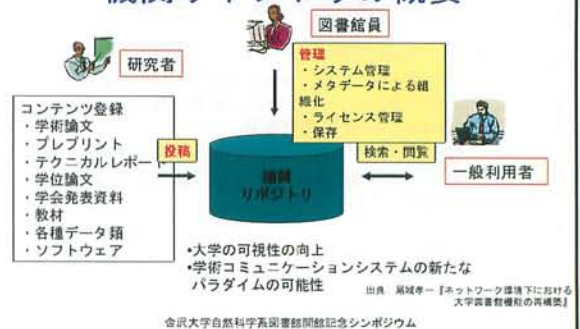
金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

機関リポジトリ

- 2002 SPARC
 - “The Case for Institutional Repositories”(position paper)
 - “SPARC Institutional Repository Checklist & Resource Guide”
- 「大学とそのメンバーが作り出したデジタル資料の管理や普及を行うために、大学がそのコミュニティに対して提供する一連のサービス」（Clifford Lynch）

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

機関リポジトリの概要



機関リポジトリの役割 (SPARCによる)

- 学術機関が直面する二つの戦略的課題への強力な対応：**大学にとって必要なもの**
 - 研究へのアクセスの拡大し、学問のコントロールを学術社会の手に取り戻し、機関や図書館の関与度を高めることにより、学術コミュニケーション・システムを改革する重要な要素。
 - 目に見える大学の指標として役立たせ、研究活動の科学的、社会的、経済的な妥当性を実証し、それによって大学の認知度、地位、社会的価値を高めるための潜在的能力を持つ。
- (邦訳：高木和子)

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

機関リポジトリの特徴

- 「機関」であることの意味
 - 永続性
 - 安定性
 - リポジトリの存在そのものがフォーマルな性格を帯びざるを得ない。(vs 主題別e-print archive)

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

機関リポジトリの現状

- 全世界で481 (2005年10月27日現在)
(<http://archives.eprints.org/> 但し、現在参照できず (火災のため))
- 多くが図書館を中心に形成している
- 地域的なばらつきがある
 - ラテンアメリカ、アジア太平洋地域に多い

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

機関リポジトリの現状

- 一つ一つのリポジトリに蓄積されている情報量はまだ少ない
 - カリフォルニア大学e-scholarship: 5,000件程度
 - 何を蓄積するかについての認識にもかなりばらつきがある
- ◆ 「自発的」な登録に期待できるか?
- ◆ 「制度化」が必要? (できるか?)

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

出版社側の対応

- 当初リポジトリに対して拒絶的態度
 - 雑誌に採択された論文のプレプリントをサーバから削除するように要請
 - 学会がプレプリントサーバで公開された論文の投稿を拒否
- ◆ 機関リポジトリへのプレプリント、ポストプリントを登録を認める雑誌の増加
 - ◆ 大手出版社雑誌の「グリーンジャーナル」化
 - ◆ 日本の学会でもそのような動きが見られる

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

グリーン・ジャーナル

- グリーンジャーナル<Green Journal>とは著者版(Author's version)の機関リポジトリ登録が認められている雑誌
 - SHERPA project (IBRoMEO project)によれば、93%がグリーンジャーナルである。
(2005年11月6日現在)

SOURCE: <http://romeo.eprints.org/stats.php>

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

学術雑誌の独占的地位

- 「査読」(質のコントロール機能)に支えられており、**その地位は全く揺らいでいない。**
 - 機関リポジトリは雑誌論文を補完している。
 - リポジトリに論文が登録されることで雑誌のアクセス回数が増えたり、引用回数が増える??
- 学術コミュニケーションにおける唯一のフォーマルなコミュニケーション手段とは言えなくなる
 - 機関リポジトリの「制度化」が進み、リポジトリへの登録がもっと多くなっていったときにどうなるのか?

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

学術雑誌と機関リポジトリ

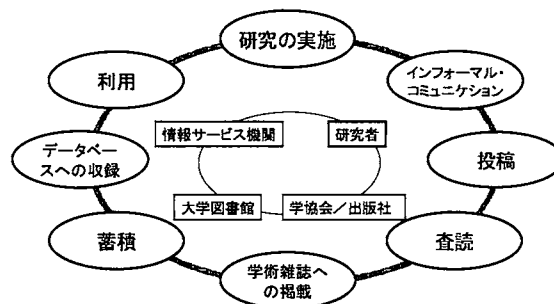
学術雑誌		機関リポジトリ
不特定多数	対象	不特定多数
査読システム	査	学術雑誌の査読とタイトルブランドに依存
電子媒体	媒体	電子媒体
図書館/図書館以外の場所(?)での保存	保存	図書館
専門家による組織化	組織化	専門家による組織化

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

学術コミュニケーションの変革へ

- 学術情報流通システムは、情報技術の影響を強く受け、さらに、情報技術によって誘導される社会的、経済的、制度的変革に直面している。

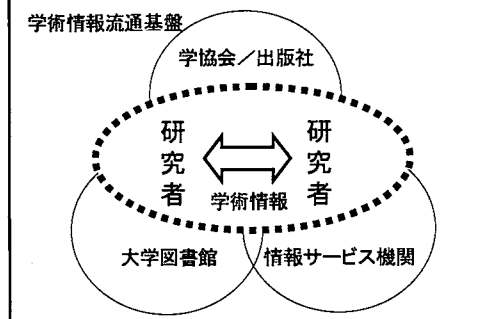
金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム



伝統的な学術情報流通システム

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

学術情報流通基盤



革新的な学術情報流通システムのイメージ

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

まとめ

- これまでの図書館の機能：一次資料の蓄積拠点／蓄積に基づくサービス
- これを新たな形で継承するのが「機関リポジトリ」である。
- 機関リポジトリは字義通りに「リポジトリ」なのであり、まずは蓄積を形成することが重要。高等教育・研究機関において図書館がそれに取り組むのは当然というか自然。
 - 「組織化」という他にはない技能が図書館や情報サービス機関にはある。
 - 長期保存が今後重要な課題となる。

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

まとめ

- これまで（これから）のストックの活性化
 - GoogleやYahoo!がWorldCat(OCLC)を取り込んでいる意味を考えよう。
 - 全部電子化するのか？(例えばOpen Content Alliance/MSN)
 - 組織化の質の問題—主題分析／主題表現の弱さをどう克服するか？
 - 真に統合化された検索の実現を目指したい！

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

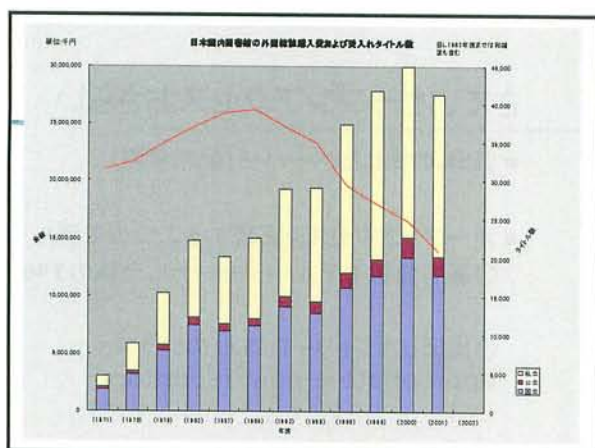
研究者は何を選択するかー 購読料・投稿料 そして機関リポジトリ

UniBio Press代表・
SPARC室員・社団法人
日本動物学会事務局長
20051122
金沢大学図書館
永井 裕子

20世紀の後半における学術情報流通の変貌は、

- 学術・科学研究の量的増大に起因する学術情報流通の商業化とその結果としてのシリアルズ・クライシス
 - 電子計算機、ネットワーク技術の展開による社会の電子化を基盤とする学術雑誌の電子ジャーナル化
- という二つの事態が複雑に絡み合うことによって生じたと考えることができる。

土屋 俊 Libraries Today Vol.42, No.1 学術情報流通の最新の動向



生物系学協会の状況ー購読料モデルは存在したのか

- 小さな学会がいくつも存在。生物系の多様性を反映？ー物理学学会、化学学会、では生物学会は？
- 学会間の話し合いは？ー生物科学学会連合の活動は生物学全体を統括できるか
- いくつものジャーナルの存在。

何誌あるのだろうか？

学術会議WEB上 1574学会うち100から105学会が生物系学会？？(2005. 7. 15)

国内雑誌は図書館に購読されていたのか？

日本の学術誌は販売されていなかった？

- 学会誌は会員のためにあるものであり、会誌を販売するという意識はなかなか育たなかった。いや、むしろ、会員であることでの差別化をしていた。
- 一方で、海外への認知度を上げたいという意識は早くからあり、商業出版社に販売を委託した学会もある。

しかし、国内では、図書館側は、日本の学会誌を視野には入れていなかった。いや、学会は図書館を視野に入れていなかった。

日本の生物系ジャーナルの状況

およそ4つに大別できる

- 海外商業出版社からの発信(営利)コスト回収モデル？
- UniBio Press(SPARC選定誌・非営利)コスト回収モデル？
購読図書館数をいかに増やすか
- 電子ジャーナルはJ-STAGE,
電子ジャーナルで海外発信という目論み？
- 冊子体のみ発行-会員内での購読？

Zoological ScienceのOA化を目指す (投稿料モデルで考える)

○投稿料モデルー1冊の出版費 平均130万円 10論文掲載 1論文につき15万円

論文を投稿するときは、オープンアクセス誌に投稿し、しかも15万円を支払える。しかもそのジャーナルとしてZSを選ぶ研究者を常に抱え続ける必要がある。できるだろうか？

科学研究費は唯一伸びている??一学協会補助はどうなる？

- 平成13年度 161億円(11.3%)1580億円
過去最高の伸び！
- 平成14年度 123億円(7.8%)1703億円
- 平成15年度 62億円(3.6%)1765億円
厳しい財政事情の中---
- 平成16年度 65億円(3.7%)1830億円
- 平成17年度 50億円(2.7%)1880億円
- 平成18年度マイナス予算??

JSPS平成19年度からの変更点

- 過去3年間、外国籍又は海外の研究機関の所属の研究者からの投稿論文の掲載がなく、かつ海外での有償頒布がないもの
- 学術誌の発行必要経費に対する、刊行する学協会等の自己財源による充当の比率が、原則として半分に達しないもの。(「オープンアクセス」に対応しようとするものは除きます)

さて、オープンアクセスおさらい

- JISCの出したペーパー(配布資料)
- オープンアクセスを実現する二つのモデル
○著者負担モデルージャーナル全体の1%
- 機関リポジトリRCUKのいう An appropriate e-print repository

Nature 20040901

The best business model for scholarly journals: an economist's perspective

The answer to the question
"What is the best business
model for scholarly journal?"
"depend on who is asking.

しかし、絶対に変わらないものがある

- 学術情報の主体は、研究者である。

学術情報を生み出し、時に仲間の研究論文を査読し、批判し、そして納得したものを発信し、また同時に、発信された情報をその受け手となって読み、自らの研究のために利用し、また批判し、また情報を生み出す。

研究者セルフアーカイビングに関する プレ調査(動物学会)

- すでに、UKではAlma Swan (Key Perspective社)の包括的調査がある。
<http://eprints.ecs.soton.ac.uk/10999/01/jisc2.pdf>

動物学会調査

- 80名の回答

教授 24名 助手 11名
助教授 21名 その他 14名
講師 9名 無回答 1名

オープンアクセスを知っているか

- はい 48名
- いいえ 29名
- 無回答 3名

- 所属機関、図書館がオープンアクセスについてあなたの注意を喚起したことがあるか
- はい 9名 いいえ 70名 無回答 1

あなたはオープンアクセスジャーナルを刊行している団体または刊行されている雑誌タイトルをご存知ですか

- はい 17名
- いいえ 60名

雑誌タイトル PNAS、JBC、PlosBiology
Genome Biology、Marine Biology
刊行団体 日本細胞生物学会、PLOS、中国科学院動物学研究所、BioMed Central

もう一度おさらいオープンアクセス

- | | |
|-------------------------|--------------------------------------|
| ■ NIH方針 | ■ RCUK方針 |
| ■ 12ヶ月以内に | ■ 出版後直ちに |
| ■ 著者が望むなら | ■ 義務化 |
| ■ PubMed Centralへのリポジトリ | ■ An appropriate e-print repositoryに |

ALPSPの回答(20050805)

- 自由に閲覧できるリポジトリへ、研究成果論文をセルフアーカイビングしなさいという政策は、学術雑誌を悲惨なシナリオへと帰結させることになるだろう。

Association of Learned and Professional Society Publishers.
ALPSP response to RCUK's proposed position statement on access to research outputs. 20050805

図書館と研究者の対話を目指して

- 主体である研究者は何をすべきかー電子ジャーナル時代を迎えて(SPARCセミナー第5回アンケートから)
 - ・ 日ごろから気になっていた問題について詳しいことが聞けて、疑問が氷解した。
 - ・ 板内さんの行動をみんなでしたら(できたら)、研究者集団への社会の理解、支持はまちがいなく上がるはず。でも、みんななかなか意識を変えてくれないんでしょね。

図書館と研究者の対話を目指して

- ・機関リポジトリへの登録をやった者として、既存の雑誌との対立が起きるのではないかと疑問に思っていたのですが、その現状についてのお話を聞けて、今まさに変化すべく調整しているときであり、その重要性を理解することができました。
- ・インターネットに基づく新しい Publishing の共有化について興味深く聞かせていただきました。

World Wide Webは、研究者たちがその研究成果をいつでも、どこでも、誰にとっても利用可能にするための手段を提供している。これは、学会発表論文や学位論文、研究レポートのような他のタイプの研究成果と同様、学術誌論文にも当てはまることである、そしてそれはその論文が発表されている学術誌を自分たちの図書館が購読しているかどうかに関わりがない。これはオープンアクセスとして知られている。

研究者たちは研究成果を出版し、それによって自分の研究であるという主張を確立し、他の研究者たちがその上に研究を築いていくことを可能にする。学術誌論文の場合、これまでは、資金の豊富な学術機関しか、出版された学術誌全体の相当数を購入することができず、そのため、そうした論文にアクセスし、それを知ることが、ほとんどの研究者にとって必ずしも容易なことではなかった。オープンアクセスはこうした状況を変えるものである。

オープンアクセスとは何か

オープンアクセスの研究文献は、無料かつオンライン化された、査読済みの学術誌論文、学会発表論文、ならびにテクニカルレポート、学位論文、ワーキング・ペーパーから構成される。ほとんどの場合、読者がこうした文献を使用する際、ライセンスの制約はない。したがって、読者は研究、教育、その他の目的で自由に使用することができる。

オープンアクセスではないもの

オープンアクセスについてはさまざまな誤解が存在する。それはセルフパブリッシングのことではないし、査読と出版を回避（または省略）する方法でもない。また、ある種の二流の割引価格での出版ルートでもない。オープンアクセスとは、研究成果を研究コミュニティ全体に、オンラインで自由に（無料で）利用可能にする手段に他ならない。

オープンアクセスはどのようにして提供されるのか？

オープンアクセスはさまざまな方法で提供することができる。研究者は、各論文をオープンアクセスのアーカイブあるいはリポジトリに置くことが可能であり、またオープンアクセス学術誌に論文を発表することも可能である。さらに、研究者は論文を個人あるいは部門のウェブサイトに掲載することもできる。オープンアクセスへの3つのルートはいずれも確実に、論文が購読ベースの学術誌に隠れている場合に比べて、はるかに多くのユーザーがそれらの論文にアクセスできるようにするものであるが、前二者は第三のものに比べて、はるかに系統的かつ組織的な方法であり、他の研究者たちが論文の在り処を見つけ、それを読む機会を最大化するものである。

オープンアクセスのアーカイブあるいはリポジトリは、研究論文のデジタル・コレクションであり、論文の著者たちによってそこに登録されたものである。学術誌論文の場合、それが行われるのは、出版の前（プレプリント）もあれば、後のこと（ポストプリント）もある。これは「セルフアーカイビング」として知られている。それらは各論文のメタデータ（標題、著者、その他の書誌情報の詳細）を、「メタデータ収集のためのプロトコル（OAI-PMH）」に準拠したフォーマットで公開している。それらのアーカイブのコンテンツへのアクセスは、Googleあるいはさらに焦点を絞った効率的な検索用に専門化した検索エンジンの一つを利用して行うことができる。後者は、世界中のアーカイブのコンテンツを体系的に収集し、現在の世界的な研究のデータベースを形成している。オープンアクセス・リポジトリは多分野にわたり、大学やその他の研究ベースの機関に置かれている場合もあれば、物理学の一定の領域および関連分野をカバーする、arXiv と呼ばれるリポジトリのように、中央集中型で主題ベースの場合もある。2005年初めの時点で、英国にはほぼ40のオープンアクセス・アーカイブが存在していた。そしてさらに多くの大学、研究機関がそれぞれ、そうしたアーカイブの立ち上げを計画している。英国におけるオープンアクセス・アーカイブのリストはサウサンプトン大学のEprints.orgサイトで維持されている。学術機関にアーカイブがまだ存在しない場合、その設置の方法に関する幅広い情報をそのウェブサイトで見ることができる。セルフアーカイビングは国際的な動きであり、急速に発展している。いくつかの助成金供給機関も現在、その助成受給者の論文を収容する中央集中型のアーカイブを計画中である。

学術誌出版社が著作権上の制約により、研究者がその論文をセルフアーカイビングするのを妨げるのではないかと読者が気にかけるとすれば、ほとんどの場合、それは当てはまらないだろう。セルフアーカイビングおよび著作権に関する出版社の現在の方針は、ノッティンガム大学のSHERPAプロジェクトのウェブサイトですべて詳述されている。

オープンアクセス学術誌は、その論文がオンラインで、誰でも無料でアクセスできる査読済みの学術誌である。多くの場合、それらは印刷物でも発行されている。主として、大学の一部門から、あるいは多額の助成金で発行されている学術誌であるが、投稿料あるいはページ・チャージをまったく課さないものもいくつかある。それに対して、学術誌のコンテンツへのアクセスに対して図書館が購読を通じて支払う従来のモデルを逆にして、論文の出版に対して料金を課しているものもある。この料金は著者が支払う場合もあるが、ほとんどの場合、研究助成金あるいは機関の資金によって支払われている。読者の研究機関はすでに、オープンアクセス論文の出版の支払いを行うことを決定しているかもしれないし、あるいは読者の研究助成団体はこれを方針として採用しているかもしれない。

こうした目的のために資金を使うことを明示的に許している研究助成団体のリストはBioMed Centralウェブサイトに掲載されている。BioMed Centralは、そのポートフォリオに100以上の学術誌を有する有名なオープンアクセス出版社である。他の例としては、PLoS MedicineやPloS Biologyなど、Public Library of Scienceから出されている学術誌がある。著者が財政的に困難な場合、BioMed Central、PloSおよび他のオープンアクセス学術誌出版社は投稿料の請求を放棄するだろう。オープンアクセス学術誌によって課せられている料金は、学術誌によってかなり顕著な違いがあるが、目安としてあげれば、BioMed Centralは、その学術誌のほとんどにおいて、論文当たり330ポンドを課している、またPloSは1500米ドル（約800ポンド）を課している。2003年、JISCは英国の学術機関のために、BioMed Centralとの間で、90以上の生物医学学術誌について、投稿料の請求を放棄する取り決めを成立させた。

あらゆる学問分野におけるオープンアクセス学術誌の包括的リストはレント大学によって維持されている。2005年早期の時点で、このリストは1400を超える学術誌を含んでいた。それらのオープンアクセス学術誌の多くはインパクトファクターを持っており、Institute for Scientific Information社のWeb of Knowledge/Web of Scienceに収録されている。2004年6月段階で、239のオープンアクセス学術誌がこのカテゴリーに入っていた。別の形態のオープンアクセスは次のような「ハイブリッド」学術誌に見られる：これらは、著者が出版の支払いを行うことを選択する場合、論文を無料で誰にでもアクセスできるようにする出版物である。

ハイブリッド学術誌の例は「Proceedings of the National Academy of Sciences」であり、これは一論文を1000米ドルの料金でオープンアクセスにしている。

なぜ著者は自らの論文へのオープンアクセスを提供すべきなのか？

セルフアーカイブされている研究論文はそうでないものより頻繁に引用されるということを示す証拠が増えつつある。ほとんどの学問分野を通じて、引用の度合いは、少なくとも2倍に増加する。いくつかの分野ではさらに高くなっている。こうした形のオープンアクセスは、研究が以前よりもはるかに大きなインパクトを持つということを意味する。それだけでなく、研究成果がオープンアクセス・ベースで利用可能になる場合、研究サイクル、つまり研究成果が出版され、読まれ、引用され、それを基に他の研究者によって発展させられるというサイクルが高められ、加速される。皆さんは、自分の研究のために読んだり、利用したりする必要がある論文に対して、簡単に、そして制限なくアクセスできる方を選びたいと思いませんか？

本報告書はJISCのためにKey Perspectives社のAlma Swanによって書かれ、Sara HassanおよびJISCコミュニケーション・チームによって制作・編集されたものである。本報告書の別のフォーマットは以下で見ることができる：
www.jisc.ac.uk/publications

さらなる情報およびリソース

JISCオープンアクセス・イニシアティブ

JISCのFAIRプログラムは、学術機関の資源へのアクセス共有のためのさまざまな仕組みを探り、評価している：
www.jisc.ac.uk/programme_fair.html

DAEDALUSおよびTARDISのプロジェクトは、効果的な学術機関リポジトリ構築のさまざまなモデルを調査している：
www.lib.gla.ac.uk/daedalus および <http://tardis.eprints.org>
ePrints UK Projectは、オープンアーカイブ・リポジトリからeプリントにアクセスするための全国的、学術分野別のサービスを開発中である：
www.rdn.ac.uk/projects/eprints-uk

オープンアクセス・アーカイブおよびセルフアーカイビング
Eprints.orgサイトは、既存のアーカイブのリストおよび構築方法についての手引きを含め、オープンアクセス・アーカイブに関する一般的情報を備えている：
www.eprints.org
最もよく知られたオープン・アーカイブの検索エンジンについては以下を参照：

OALster：www.oalster.org www.oalster.org

およびCitebase：<http://citebase.eprints.org/cgi-bin/search>
SHERPAプロジェクトは、いくつかの研究大学におけるオープンアクセス・アーカイブを開発中である：

www.sherpa.ac.uk

出版社ごとの（アーカイブの）許可に関する方針は以下で調べることができる：
www.sherpa.ac.uk/romeo.php

また、雑誌別では：<http://romeo.eprints.org>

Directory of Open Access repositoriesは、オープンアクセス・リポジトリの権威あるリストを提供する新たなパイロット・サービスである：
www.openaccess.org

オープンアクセス学術誌

最大のオープンアクセス学術誌出版社であるBioMed Centralに関する情報については次を参照：
www.biomedcentral.com
投稿料の支払いに資金を当てる事を許している研究助成団体に関しては、次のリストを参照：
www.biomedcentral.com/info/about/apcfaq#grants
Public Library of Scienceに関しては：www.plos.org
オープンアクセス学術誌の最新のリストに関しては：
www.doaj.org

オープンアクセスの引用およびインパクトに関する調査

オープンアクセス研究論文のインパクト増大に関する最も初期の調査はSteve Lawrenceによるものだった：
www.nature.com/nature/debates/e-access/Articles/lawrence.html
Michael Kurtzによる調査がそれに続いた：
<http://cfa-www.harvard.edu/kurtz/jasist1-abstract.html> および
<http://cfa-www.harvard.edu/kurtz/jasist2-abstract.html>
オープンアクセス論文のインパクトに関する最新の調査はHarnadおよびBrodyによるものである：
www.dlib.org/dlib/june04/harnad/06harnad.html

他のオープンアクセスのリソース

<http://www.arl.org/sparc/>

www.arl.org/sparc/soa/#forum

米国の科学者の討論フォーラム（主に研究者向け）：

<http://amsci-forum.amsci.org/archives/American-Scientist-Open-Access-Forum.html>

HUSCAP 北海道大学学術成果コレクション

杉田茂樹 <sugita@lib.hokudai.ac.jp>
北海道大学附属図書館

22 Nov. 2005

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

1

カリフォルニア大学 eScholarship



22 Nov. 2005

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

2

グラスゴー大学 EPrintsサービス・DSpaceサービス



22 Nov. 2005

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

3

エジンバラ大学 ERA



22 Nov. 2005

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

4

MIT DSpace

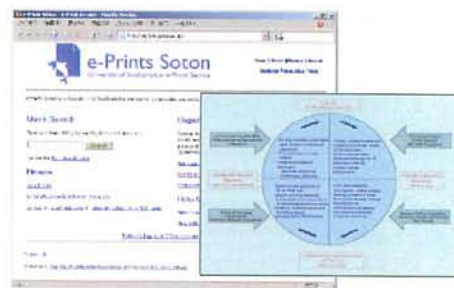


22 Nov. 2005

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

5

サウサンプトン大学 e-Prints Soton



22 Nov. 2005

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

6

ロチェスター大学 UR Research



22 Nov. 2005

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

7

ウラル国立大学 DSpace



22 Nov. 2005

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

8

千葉大学 CURATOR



22 Nov. 2005

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

9

早稲田大学 DSpace



22 Nov. 2005

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

10

北海道大学 HUSCAP



22 Nov. 2005

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

11

システム概要

- ・ソフトウェア: Linux+DSpace1.2.1
 - ダウンロードカウンタの実装
 - サービス画面独立化
 - ・英日切り替え、デザイン自由度
- ・ハードウェア
 - iBook(～5月)
 - DELL 型落ちPCサーバ(7月～)
 - ヒューレット・パッカード PCサーバ(9月～)

22 Nov. 2005

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

12

システムの選択

- OAI-PMH対応が最重要要件
- 代表的なオープンソース
 - Dspace: Java + PostgreSQL: 初期状態で組織別整理
 - GNU EPrints: Perl + MySQL: 初期状態で主題別整理
- NII報告書 + α に従いセットアップ可能
- 電子投稿・受理機能を備える。図書館職員等による代理登録を考えるなら両者ともオーバースペック
- ハードウェア
 - 試行運営段階であれば型落ちPC程度でOK。本格運営でも当分問題なし(ただし、バックアップは手厚く)

22 Nov. 2005

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

13

システムの選択(承前)

- 論文DBとしての機能要件でなく、見栄え優先で
 - 学術目的ユーザはGoogleなどから直接アクセス
 - リポジトリのトップ画面に直接来る人の関心は大学自体
 - 看板としての立派さが必要
 - たとえば、Institutional Archive Registry(eprints.org)で、使用ソフトウェア別に各国リポジトリを閲覧して、「こういうふうにした」ものを選択
- Microsoft Office形式ファイルを受贈する場合は特に、ウィルス対策も考慮

22 Nov. 2005

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

14

経緯(平成16年度)

- ワーキング・グループ設置(事務部長裁定)
- 有効性検証、先行事例調査、コンテンツ調査
- 平成16年10月「在り方について(報告)」
- グリーン・ジャーナル掲載論文調査(WoS2年分)
- 「学術情報の発信に関するアンケート」調査
 - 回答22%, うちOA理念賛同91%, 登録意思あり70%
 - 登録したくない人
 - 著作権上の問題が心配
 - 登録が面倒
 - 情報が不足していてよく分からない

22 Nov. 2005

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

15

検討・実施: IR検討WG



- 主査: 情報システム課長
- 本館
 - 情報管理課 1名
 - 情報サービス課 1名
 - 情報システム課 全員
- 北分館 1名
- 経済学部 1名(係長)
- 理学部 1名
- 工学部 1名(係長)
- 薬学部 1名
- 農学部 1名

22 Nov. 2005

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

16

実験運用への検討事項

- 誰の?
 - 助手以上? 博士まで? 修士まで? 学部生は?
 - 多種多様な客員的な人々は? 元構成員は?
- どんなものを?
 - 所属中の成果? 前勤務地での論文は?
 - 査読論文誌? 非査読論文誌? 一般商業誌?
 - 「商工会議所だより」への寄稿文? 学会発表?
 - 授業資料?
 - プレプリント等? (→品質説明をどうする)

22 Nov. 2005

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

17

実験運用への検討事項(承前)

- 「その他、特に認めた...」「詳細は別途定め...」「原則として」
 - 学内意見を聞きながら柔軟に変更できる余地
- 著作権が出版社にない物件(=研究者にとって完全に自分のもの)の権利宣言
 - 暗黙に日本の著作権法ベース? CC適用?
 - (むしろ著作権のありようがはっきりしている雑誌掲載論文のほうが迷いが少ないです)

22 Nov. 2005

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

18

実験運用への検討事項(承前)

- 組織別整理? 主題別整理? 人頭整理? 資料ジャンル別整理?
 - 組織別整理→改組へのシステム上の対応方を考えておく必要
 - 紀要丸ごと、といったまとまりのあるコレクションを受け入れることになった場合にどう取り扱うか
 - Dspaceなら、community=タイトル単位、sub-community=巻、collection=号で電子ジャーナルサーバっぽく見せられる。
- 専用の実施規程作成、または、電子資料受贈の規程化(あるいは寄贈図書受入規程の拡張)

22 Nov. 2005

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

19

第1期実験運用(3月~5月)

- 学内限定公開(→説明上の致命的弱点となった)
- システムの動作検証
- 「自身投稿」スタイル
- 文書による紹介と登録要請
 - アンケート積極回答者へ
 - WoS上のGreen論文リストを添えて
- 個別ヒアリング

22 Nov. 2005

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

20

初期の失敗

- 図書館「学術情報を登録してください」
 - 「何を言っているのかわからない」
 - 「研究業績集に出しているのにまたか」
 - 「WoSで入手できているものをなぜあらためて入力させようというのか」
- 図書館「本文をください」
 - 電子ジャーナルからダウンロードしたPDF
- DSpaceの煩雑な投稿プロセス
 - 「見ただけでやる気が失せた」
 - 「こういう作業に許せるのは1分」

22 Nov. 2005

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

21

初期の失敗(承前)

- 「機関リポジトリ」
 - イメージできる人は皆無
 - 「要するに『北大版電子ジャーナル』ということですね」(→実際はIRと出版事業は本質的に別物だが、感覚的にはおおむね正しい)
 - 電子ライブラリー、コレクションなどのなじみのある語彙を使え
 - 北海道大学学術リポジトリ→北海道大学学術成果コレクション、に変更

22 Nov. 2005

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

22

初期の収穫

- カレント指向にシフトする踏ん切り
 - 著者原稿は残っていない
 - OA擁護の観点からも、賞味期限切れ論文の選及入力の意義は薄い
 - 「先生方に手間をかけるのは本意ではありませんので、あえて過去の論文を探して下さる必要はありません。ぜひ最近の、それから、これからの文献を寄贈してください」

22 Nov. 2005

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

23

初期の収穫(承前)

- 図書館のコレクション構築という位置づけ
 - いさぎよく図書館本位の説明+お願いに
- 全面的に図書館職員による代理登録へ
 - 寄贈資料の目録作成・装備はもともと図書館の役割
 - 先例: セント・アンドリュース大学

22 Nov. 2005

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

24

第2期実験運用(7月～)

- 北海道大学学術成果コレクション
 - 図書館の電子資料コレクション
 - 機関リポジトリ機能をも果たす
- 学外公開
- OAIリポジトリ公開

22 Nov. 2005

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

25

公開に際して

- BOAI賛同署名(無料電子論文アーカイブを持つ機関は署名可能)
- NIIへのハーベスト依頼
- OAIデータプロバイダリスト、IAR(EPrints.org)、DSpace実装機関リストへの登録
 - 世界の情報サービス機関がハーベストしに来てくれる
- クローリング(ノハーベスティング)依頼: Google Scholar、Scirus(エルゼビア)
- Open Access Japan「日本の機関リポジトリ」へ追加を依頼

22 Nov. 2005

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

26

研究者向け説明会

- 8～9月, 図書館1回、出張27回
 - チラシのボックス配布+ポスター告知
 - 参加者は合計110名程度
 - 「知らなかった。チラシはSPAM」
- 個別訪問(教員昼食会、ゼミ、研究室)20回程度
 - 共感者シンパを作る
 - 図書館委員会下に設置する検討部会のコア
- 教授会類への出展なし

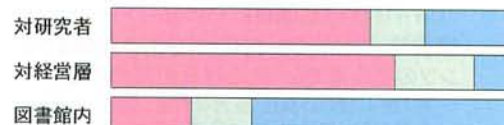
22 Nov. 2005

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

27

説明会: ポイントとバランス

図書館本位の説明 蔵書構築の一環・ 電子媒体資料 の寄贈受入開始	社会に対する 説明責任の履行・ アカウンタビリティ・ 業績集成	雑誌危機・ SPARC・ オープンアクセス・ 被引用数向上
---	--	--



22 Nov. 2005

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

28

館内外関連組織との調整

- 研究協力課
- 知的財産本部
 - 論文は「成果有体物」にあたるかを確認
- OCW検討WG
 - 年度更新による当年度教材の消失
 - 機関リポジトリ: アーカイブとしての意義
- 全学図書系職員への説明
 - 全く重要ではなく、かつ、極めて重要
 - 共通理解と共感=活動の足場

22 Nov. 2005

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

29

個別訪問ヒアリング

- 説明ではなくインタビュー
- 「5分10分で結構です」
 - 実際には、時間と話題の続く限り、快くつきあってもらえるケースが大半。最長2時間。
- 研究生活についての理解
 - 機関リポジトリ設立に限らず、図書館活動全体にとって非常に有益

22 Nov. 2005

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

30

きっかけは何でもいい

- 「私たち事務官はどうも論文査読のプロセスについて、今ひとつ掴めていないので助言を下さい」
- 「図書館委員会での先生の発言について、図書館としても悩みどころであるので、さらにもう少し詳しく助言を頂きたい」
- 「LANLのプレプリサーバについて教えてください」
- 「権利処理への懸念があるとのことですが、私たちの考えているやり方についてご意見を」
- 「DSpaceをお触りになってみていかがでしたか」

22 Nov. 2005

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

31

予備知識

- 雑誌危機(自大学のEJ予算(と財源)、契約タイトル数、内外の状況)
 - 大規模大学の場合はEJ(とBig Deal)による状況の変化について正しく、小規模大学の場合は状況をストレートに説明
 - NIHプロポーザル等の海外情勢についてもひと通り頭に入れておく
- インパクトファクターについての正確な知識

22 Nov. 2005

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

32

予備知識(承前)

- 著作権、RoMEO
 - ただし、**著作権が誰にあるかは問題ではない**
 - 問題とするのは、再利用についての出版社との契約(投稿規程)上の許容状況
 - 著作権というより版權というほうがイメージに近い
 - 図書館とRoMEOが調査・解決できるのはコンテンツの著作権でなく出版社の契約内容
 - 権利的に怪しい部品(巨大な引用、図表、写真)を含む資料(とくに教材)は、「慎重に検討」

22 Nov. 2005

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

33

個別訪問ヒアリングの話題1

- 査読・編集プロセス(図を持参する)
 - 出版社ごとにどう違うか。ジャーナルごとにどう違うか。国内学会論文誌はどうか。どの時点から電子か。フォーマットは。査読所要期間。
- どんな雑誌に投稿する? 選択の基準は?(IF?) 内外比率。和欧比率。
- 出した論文の原稿は保存? 保存状態は。どのぐらい昔のものまであるか(電子的に)。
- 載るだけで嬉しいか。より読まれると嬉しいか。引用されてはじめて嬉しいか。

22 Nov. 2005

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

34

個別訪問ヒアリングの話題2

- 公開を控えたい、という需要
 - やりかた: 載せない、アクセス制限、embargo
 - 先取権、特許、修士論文と学位論文との違い
- どんなものがIRに入ると重宝されると思うか
 - 一般市民に対して、研究者に対して
 - 公開講座、予稿集、科研報告書、学位論文... (灰色文献)
- 抜き刷り交換
- 論文は誰のものか
 - 第一著者、最終著者、講座内の上下関係
 - IR登録について共著者への確認の必要度

22 Nov. 2005

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

35

個別訪問ヒアリングの話題3

- Googleに学術情報を期待する? Google Scholarは?
- 学内出版物(とくに紀要)に関わっているか。査読の有無。電子ジャーナル化の検討は。

22 Nov. 2005

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

36

実務

- 海外雑誌掲載論文: RoMEO→原典チェック
 - プレプリントOK? ポストプリントOK?
 - 出版社バージョンもOKなところもあり
 - IEEE, Royal Society of, Cambridge University Press,
 - Embargoの有無
 - Blackwell: タイトルごと6~12ヶ月
- 国内雑誌掲載論文: RoMEOがないだけで基本は同じ

22 Nov. 2005

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

37

著者版問題

- What rights do I retain as author?
 - the right to post a **revised personal version** of the text of the final article (to reflect changes made in the peer review and editing process) on **the author's personal or institutional web site or server**, with a link to the journal home page (on elsevier.com);

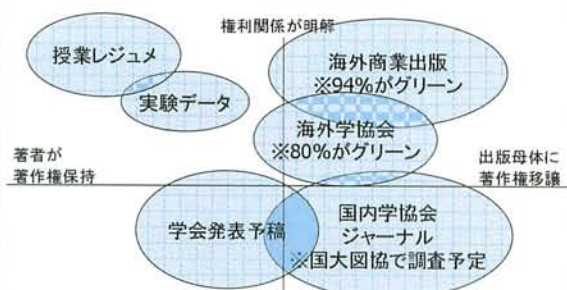
(Elsevier)

22 Nov. 2005

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

38

出版社交渉



22 Nov. 2005

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

39

わからなければ聞いてみる

- 9割以上は許諾が得られた
- 国内では、「利用許諾申請書」類の紙提出を求められることも
 - 理事会・委員会にかかる
- RoMEOで非許諾でもだめもとで聞いてみる
 - 許諾が得られる場合もある
 - 著者が購入したもの(抜刷PDF)であれば出版社版公開OKの例もあり
 - 国内学会: 国大図協でRoMEO調査を予定しているが、それに頼ることなくどんどん聞く(コンタクトして大学の活動を知らしめる必要)

22 Nov. 2005

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

40

まとめ

杉田茂樹 <sugita@lib.hokudai.ac.jp>
北海道大学附属図書館

22 Nov. 2005

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム

41



オープンアクセスとセルフアーカイビングについて

エルゼビアの対応

金沢大学自然科学系図書館開館記念シンポジウム
2005年11月22日
エルゼビア・ジャパン株式会社
高橋 昭治
s.takahashi@elsevier.com



本日の話の流れ

- エルゼビアの現状
 - ジャーナル出版の現状
 - ScienceDirectの現状
- エルゼビアのオープンアクセスへの対応
 - オープンアクセス・ジャーナルに対する考え
 - セルフアーカイビングへの対応
 - 機関リポジトリ
 - 分野別リポジトリ
 - 出版の一定期間後の無料公開



エルゼビアのジャーナル出版の現状

- 約1,800誌を出版
- 年間約270,000論文(2004年)
 - 前年比約5%の増加
- 4,000人のエディター、40,000人のエディトリアルボードメンバー
- Author Gateway (<http://authors.elsevier.com>)
 - 著者向けの投稿情報と受理後の原稿のトラッキング
 - 登録ユーザーは約250,000人
- Electronic Editorial Systems
 - オンライン投稿システム
 - 現在、約750誌のピアレビュー・プロセスを電子的に処理
 - 2006年末までに全ジャーナルの処理を電子化する予定



主要STM出版社の論文シェア

	2003年	2004年
Elsevier	24.6%	25.0%
Springer (Kluwer Academicを含む)	8.3%	7.7%
Blackwell	4.9%	5.3%
Wiley	4.5%	4.6%
Taylor & Francis	3.2%	3.0%
American Chemical Society	3.0%	3.0%
American Institute of Physics	2.2%	2.8%
Wolters Kluwer	2.8%	2.7%
IEEE	1.8%	1.9%
American Physical Society	1.7%	1.7%

(ISIデータに基づく社内分析)

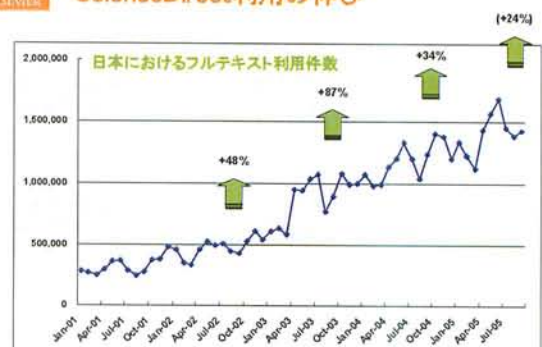


ScienceDirectの現状

- 掲載論文数: 727万件(2005年11月11日現在)
- バックファイル・プログラム(1995年より前のデータの電子化)がほぼ完了
 - 約430万件がバックファイル
 - 最も古い *The Lancet* は1823年まで遡る
- 冊子体にはない特長
 - Articles in Press(出版前の論文の公開)
 - マルチメディア
- 非購読誌へのアクセス・オプション
 - フリーダム・コレクション
 - サブジェクト・コレクション
 - シェアード・アクセス(コンソーシアム向け)
 - ペーパービュー
- 冊子体の利用形態の電子ジャーナルへの拡張
 - 図書館相互貸借
 - ウオーキン・ユーザー



ScienceDirect利用の伸び





エルゼビアのオープンアクセスへの対応

- ・ オープンアクセス・ジャーナルに対する考え
- ・ セルフアーカイビングへの対応
 - ・ 機関リポジトリ
 - ・ 分野別リポジトリ
- ・ 出版の一定期間後の無料公開

7



オープンアクセス・ジャーナルに対する考え

- ・ オープンアクセス・ジャーナル(著者支払いモデル)
 - ・ Public Library of Science, BioMed Centralが代表的
- ・ エルゼビアの考え
 - ・ 他社の動向を注意深く見守っているが、現在のままのモデルは、長期的、大規模には維持が困難であると考えている。
 - ・ オープンアクセス・ジャーナルが著者に課金している1論文あたりの金額は、実際の出版費用よりかはるかに少ない。
 - ・ オープンアクセス・ジャーナル(他機関からの助成を受けている)
Public Library of Science:US\$ 1,500 BioMed Central:US\$ 525
 - ・ ハイブリッドモデル(購読型とオープンアクセスの両方を提供)
Springer Open Choice:US\$ 3,000
Blackwell Publishing Online Open:US\$ 2,500
 - ・ Open Society Instituteの試算によれば、STMジャーナルの1論文を出版するための費用は平均US\$ 3,759

8



オープンアクセス・ジャーナルに対する考え(続き)

- ・ エルゼビアの考え(続き)
 - ・ 新しい論文を出版するための費用では、電子ジャーナル・システムの長期的な維持、技術の変化への対応が困難である。
 - ・ すべてのジャーナルがオープンアクセス・ジャーナルになった場合、費用負担が、論文発表の多い一部の研究志向の大学や研究機関に集中するため、不公平が生じる。

9



機関リポジトリへの対応

- ・ 機関の研究成果を機関リポジトリに掲載しようという動きが活発になっている。
- ・ エルゼビアの対応
 - ・ 基本的には機関リポジトリを支援しているが、著作権保護、出版社による付加価値とのバランスも考慮している。

10



機関リポジトリへの対応(続き)

- ・ 著者によるウェブ掲載に関するエルゼビアの方針
 - ・ 論文の出版後、最終原稿の著者バージョンを個人または所属機関のホームページ(機関リポジトリを含む)に掲載できる。
 - ・ 最終原稿・・・査読および編集の過程でなされた変更を反映させることができる。
 - ・ 著者バージョン・・・Word、TeX、テキストなど著者が用意したファイル。ScienceDirectからダウンロードしたPDFやHTMLは不可
 - ・ 論文の書誌情報、DOIまたはScienceDirectのジャーナルホームページへのリンクを掲載すること
 - ・ 商業目的の使用は不可

11



分野別リポジトリへの対応

- ・ 研究の助成金を出している機関が特定の分野別リポジトリに最終原稿を提供することを推奨または義務化する動きが出てきている。
 - ・ 米国国立衛生研究所(National Institutes of Health:NIH)
 - ・ 英国ウェルカム財団(Wellcome Trust)など
- ・ エルゼビアの対応
 - ・ 助成機関ごとに方針または合意を形成することが必要
 - ・ 同一内容を複数のチャネルで出版するプログラムを支持することは難しい。
 - ・ エルゼビアの方針と助成機関の方針が矛盾することによって、著者の投稿先の選択の自由が奪われたり、著者を違法な状態におくことは避けなければならない。

12



分野別リポジトリへの対応(例1)

- NIHパブリック・アクセス・ポリシー
 - 2005年5月2日以降、NIHから助成を受けた研究に基づく論文の最終原稿を、出版後12ヶ月以内にPubMed Central (PMC)に提供するように求める。
- エルゼビアの対応
 - 著者が希望した場合には、著者に代わってエルゼビアがPMCに最終原稿を提出した上で、出版の12ヶ月後にPMCに対して一般公開する許可を与える。

12



分野別リポジトリへの対応(例2)

- 英国ウェルカム財団のオープンアクセス計画
 - 2005年10月1日以降に助成を受けた研究に基づく論文は、出版後6ヶ月以内に、PMC(またはUK PMC)に最終原稿を提供しなければならない。
 - 2006年10月1日以降は、ウェルカム財団の助成を受けた研究に基づくすべての論文は、出版後6ヶ月以内に、PMC(またはUK PMC)に最終原稿を提供しなければならない。
- エルゼビアの対応
 - 対応策を検討中

13



出版の一定期間後の無料公開

- 論文の出版から一定期間経過した後に無料公開
 - Delayed AccessまたはEmbargoと呼ばれる。
 - Budapest Open Access Initiative (BOAI) が定義するオープンアクセスではない。
 - HighWire PressやPubMed Centralで提供されているライフサイエンス系ジャーナルの多くがこのモデルを採用
- エルゼビアの対応
 - Cell Pressの10タイトル(*Cell*, *Neuron*, *Molecular Cell* など)は、1995年以降、かつ12ヶ月経過した論文を無料公開
 - *FEBS Letters* は、12ヶ月経過した論文を無料公開

14



参考URL・参考文献

- Open Society Institute. Guide to Business Planning for Launching a New Open Access Journal. Edition 2, July 2003. p.18
http://www.soros.org/openaccess/oajguides/business_planning.pdf
- Author Posting of Final Papers to Public Web Sites
http://www.info.sciencedirect.com/licensing/policies/author_posting/
- Policy on Enhancing Public Access to Archived Publications Resulting from NIH-Funded Research
<http://grants.nih.gov/grants/guide/notice-files/NOT-OD-05-022.html>
- Elsevier NIH policy statement
<http://www.elsevier.com/wps/find/authors/home.authors/nihauthorrequest>
- Wellcome Trust Announces Open Access Plans
<http://www.wellcome.ac.uk/doc/WTX025191.html>
- Open Access: yes, no, maybe
Karen Hunter, <http://www.nature.com/nature/focus/accessdebate/3.html>
- エルゼビアの電子戦略
高橋昭治、情報の科学と技術 Vol.55 No.6 (2005.6)

15